

特別講演

講演者のプロフィール

小林 隆（こばやしたかし）

【略歴】

1957年、新潟県生まれ。東北大学で国語学を学び、東北大学大学院に進む。国立国語研究所研究員・主任研究官を経て、東北大学助教授・教授。現在は名誉教授。博士（文学）。

【主要業績】

小林隆（2004）『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房

小林隆（2023）『語用論的方言学の方法』ひつじ書房

小林隆編（2006～2008）『シリーズ方言学』全4巻、岩波書店

小林隆編（2018）『感性の方言学』ひつじ書房

小林隆編（2018）『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房

小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言いかた西東』岩波書店

東北大学方言研究センター（2019）『生活を伝える方言会話—資料編・分析編—』
ひつじ書房

「私」が発話に現れやすい地域

— 自己と他者の関係を視点に —

小林 隆（東北大学名誉教授）

1. 「おら、やんだ」と「いやや」

この講演では、発話の中に「私」が現れやすい地域とそうでない地域がありそうだ、ということについて論じてみたい。特に、言語行動や表現法の分野では小林（2023）で指摘したように、東北と近畿に顕著な違いが見込まれるため、ここでも両地域を対比的に扱っていく。

さて、何かを拒絶するとき、東北人なら「おら、やんだ」、関西人なら「いやや」と言う、そんなイメージが私にはある。この場合、東北は「おら」すなわち「私」が表現に現れている。近畿の「いやや」にはそれが出ていない。

まず、LINE スタンプを覗いてみよう。方言 LINE スタンプが言語行動の地域差を反映していることは、齋藤すみれ（2019）が指摘するとおりである。



トメ子さん 宮城弁



岩手県の方言！
ぺっこオニ6



おもしろい大阪の
おばちゃん PART2



京都弁☆ラガちゃん

東北方言のスタンプには、単に「やんだ」とするものに混じって、たしかに「おら、やんだ」とするものが見られる。一方、近畿方言のスタンプは「いやや」のみで、例えば「わい、いやや」「わたし、いややわ」などとするものは見当たらない。ここから、次の仮説が導かれる。

[1] 近畿方言より東北方言の方が、「私」が発話に現れやすい。

拒絶の場面については、東北大学方言研究センターが2009年に行った「感動詞の全国調査」に項目が盛り込まれている。通信調査による記述式のアンケート調査で、該当の項目は第2調査票14番「拒絶する」である。調査文は次のようになっている（調査の詳細は小林隆編2022をご覧ください）。

14. 「いやだ」という意味で、相手を拒絶するとき、どんな言い方をしますか。

参考：イヤベー、エーッタ、ザーマヤ、ダーラ、ダン、バジャ

この調査の結果を見ると、東北では青森、岩手、宮城、山形、福島の計 12 地点から「私」を含む回答が得られている。例えば次のような例である。

- (1) ワイダケ ワガネジャ。(青森県むつ市大畑町正津川平)
- (2) アリヤー ヤンタゴドー。オリヤー ヤンター。(岩手県紫波郡紫波町星山字間野村)
- (3) オラ ヤンダ。(宮城県亙理郡山元町浅生原字南山下)
- (4) シンナジー。オラ ヤンダジー。(山形県西置賜郡飯豊町黒沢)
- (5) ヤンダー オラ。(福島県双葉郡浪江町請戸字本町)

一方、同項目の近畿では、単に「イヤヤ」「アカン」などが回答されたのみで、「私」はまったく現れてこない。LINE スタンプに認められた傾向は、一応、調査によっても確かめられたことになる。

しかし、これだけで「近畿方言より東北方言の方が、「私」が発話に現れやすい」と断じるわけにはもちろんいかない。別の項目も見てみよう。同じく「感動詞の全国調査」から、「拒絶する」とはある意味正反対の「引き受ける」(第 2 調査票 22 番項目) を取り上げる。

22. たいへんな仕事を誰も引き受けないので、一大決心をして自分が引き受けることにしました。そのとき、何と言って引き受けますか。

参考：オイキタ、オットマカセ、マッカセ、ヨシキタ、ヨッシャ

この項目の回答には、文法的に「私」が出現してもおかしくない形式(述部)が多く見られる。次のようなものである(各形式は共通語に置き換えて表示する)。

- 「私が」が期待される形式
「やる」「やるか」「やろう」「やろうか」「やってみる」「やってみるか」「やってみよう」「やってみようか」「やってやる」「やってやろうか」/「する」「するか」「しようか」「し
てみる」「してみるか」「してやろう」「させてもらう」
- 「私に」が期待される形式
「任せろ」「任せてみる」「任せておけ」

これらの形式を含む回答に、「私」が現れるか否かを確認していくことになるが、実際には、「私」が現れる回答と現れない回答が見られる。具体的な回答をいくつか挙げてみよう。まず、「私」が現れる例である。

- (6) シカダネナー。ヒバ オレ ヤッガー。(秋田県山本郡藤里町粕毛字春日野)
- (7) シャナイ。ワシガ ヤルフ。(京都府京田辺市田辺稲葉)
- (8) ヨッシキタ。オレサ マガセロー。(岩手県紫波郡紫波町星山字間野村)
- (9) ワシニ マカシトキ。(滋賀県犬上郡多賀町多賀)

次に、「私」が現れない例である。

- (10) ヨシキタ。シタラ ヤルガ。(秋田県大仙市刈和野)
- (11) シャーナйна。ヤルワ。(京都府京都市右京区京北鳥居町松根)
- (12) ドラ ウンダラ マガセロ。(岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里)
- (13) ヨッシャ。マカシトケ。(滋賀県米原市高番)

全体的に見るために、この調査の「私」の出現地点を数えたのが表1である(「私」回答地点数/全回答地点数。複数回答の地点があるため、数値は足して100%を超えている)。

	「私」あり	「私」なし	その他
東北(145地点)	40.0(58)	31.0(45)	36.6(53)
近畿(98地点)	15.3(15)	40.8(40)	51.0(50)

表1 「引き受ける」における「私」の出現

この結果を見ると、東北では「私」ありの地点が「私」なしの地点より多く、近畿ではその逆になっていることがわかる。

なお、「その他」としたのは、「よし(ヨッシャを含む)」「よしきた」「しかたない(シャーナインを含む)」などが単独で回答された地点である。これらは感動詞化した形式(句的感動詞)であり、慣用句的に用いられるものである。近畿に目立つのは、この地域では定型的な感動形式が定着しており(澤村美幸2011第6章、小林隆2023第19章など)、感動詞に狙いを定めたこの調査では、それが単独で回答されやすかったと考えられる。ただし、近畿でも動詞述語を持つ形式は回答されており、「その他」を除いて集計し直すと、東北と近畿の「私」の出現率はさらに差が開くことになる。

2. 「話し方の全国調査」から見た「私」

2.1. 言語行動の種類と「私」

前節では、「拒絶する」「引き受ける」という項目の調査結果を取り上げた。このような言語行動では、近畿より東北で「私」が発話に現れやすいことがわかった。それでは、ほかの場面ではどうだろうか。「拒絶する」「引き受ける」といった場面だけでなく、どんな言語行動の場合にも東北の方が近畿より「私」が現れやすいと言えるか考えてみたい。

この問いに答えるために、ここでは、東北大学方言研究センターが2015年に実施した「話し方の全国調査」の結果を分析する。この調査は、さまざまな言語行動の地域差を明らかにするために、42場面からなる記述式の調査票を作成し、やはり通信調査法で実施したものである(調査の詳細は小林隆編2021をご覧ください)。例えば、「説明する(一言断る)」という言語行動を見るために設定した「6. 会合を中座する」であれば、次のように質問している。

6. あなたは町内会の集まりに出席しています。まだ途中ですが、病院の予約があって中座しなくてはならなくなりました。座長には前もってそのことは話してあります。近くに座っている近所の知り合いに言葉をかけて途中で退席するとしたら、どんな言い方になりますか。

この質問に対して、一例を挙げれば次のような回答が得られた。(14)(15)では「私」に当たる「ワ」「オレ」が現れているが、(16)(17)にはそれが見られない。

- (14) ナンド ワ 病院サ 行グ時間ニナツタハンデ、先ニ 帰ルジャ。(青森県東津軽郡平内町小豆沢字小豆沢)
- (15) オレ コレガラ 病院ノ予約 アツカラ、ワリゲンチョ 抜ゲツカンナイ。座長ニワ前モツテ ユツテアツカラ。(福島県福島市松川町天王原)
- (16) スンマセンナ、チョット 用ガ アルンデ、ヒマ モライマスワ。スンマセン。(三重県松阪市飯高町作滝)
- (17) ゴメンヤケド、コレカラ 病院ニ 行カンナアカンカラ、先 帰ルワ。(大阪府南河内郡千早赤阪村水分)

調査結果の全体をながめてみよう。この調査で、東北と近畿の回答に現れた「私」を表す形式は表 2 のようになる。数値は、それぞれの形式の出現数を示す。

意味	形式	東北	近畿
1人称単数 (私)	オレ・オラ	348	24
	オイ・オエ	15	0
	ワ・ワー	73	0
	ワタシ	31	72
	ワシ	0	68
	ワイ	0	3
	ボク	0	20
	ジブン	0	2
1人称複数 (私たち)	オレタチ・オラダ	7	0
	ワタシタチ	1	0
	ワシラ	0	1
	ワイタチ	1	0
	ワイラ	0	2
1人称「家」 (私の家)	オライ・オラエ・オリヤ	55	0
	オイ(俺の家)	1	0
	イエ・エー・エ	11	0
	オラホー・オラホ	3	0
	オレトコ・オラド	2	0
	オラゲ	2	0
	ワシトコ	0	1
	ワシゲ	0	1
	ワガヤ	2	0
	ウチ	7	40
	ウチゲ・ウチネ	0	2
計		559	236
調査地点数(42場面)		5358地点	3835地点
出現率		10.43%	6.15%

表 2 「話し方の全国調査」における「私」(全体)

なお、ここでは、1人称単数(「私」)に該当するの形式のほか、自己を含み、他者と区別する範疇である1人称複数の形式(「私たち」と「家」の意が加わった形式(「私の家」)も対象にした。後者の「私の家」に当たる形式は、あくまでも人が想定される「家庭・家族」の意であり、単に建物としての「家屋」を表す形式は採らなかった。また、「オイ」は「オレ(俺)」の音変化と「オライエ(俺の家)」の形態変化の2通りの場合があり、そうした複数の意味が考えられるものは、回答の文脈や先行研究の成果を参考に、どちらか判断した。表 2 の数値を見るかぎり、1人称単数、1人称複数、1人称「家」の3者で、東北と近畿の割合に大きな差がなく、以下、これらをまとめて扱うことにする。

表 2 には合計出現数も示したが、東北が 559、近畿が 236 となっている。ただし、東北と近畿ではそのものの調査地点数(42場面全体の回答地点数)が異なるので、それを母数とし

て上記の数字を除すると、出現率は東北が 10.43%、近畿が 6.15%となる。2 倍とまではいかないものの、かなり大きな開きがあると言ってよい結果である。「私」の現れやすさは、ここでも東北が近畿を上回る。

以上は、この調査の全体の傾向である。もう少し細かく、場面ごとに見てみよう。図 1 は場面ごとの「私」の出現率を示したものである。場面名に付した数値は実数であり、例えば、最初の場面の (117/140・74/99) は、東北では回答のあった 140 地点のうち 117 地点で、近畿では同じく 99 地点のうち 74 地点で「私」が出現したことを意味する。

この図を見ると、「私」の出現はほぼどの場面でも東北が近畿を上回っている。「遅刻を非難する」「食事を褒める」の 2 場面で近畿の方がわずかに多いが、他の場面はいずれも東北の方の数値が高い。さまざまな言語行動において、東北方言では近畿方言より「私」が発話に顔を出しやすいと言ってよい。ここから、次のようにまとめることができそうである。

[2] 言語行動の種類に関わらず、東北方言は近畿方言より「私」が発話に現れやすい。

具体的にどのような発話に「私」が出現するか確認してみよう。ここでは、東北の出現率が 10%を越える 11 場面について見ていく(「帽子を自慢する」は絶対数が少ないので除外する)。

「自分の傘でない」と答える」

「私」が出現するのは、「私の傘ではない」「私ではない」「私の傘と違う」「私のと違う」といった判断提示の発話である。

「自分の傘だと答える」

「私」が出現するのは、「私の傘だ」「私のだ」といった判断提示の発話である。

「野菜を分けてやる」

「私」が出現するのは、野菜の出所に言及する「私の家／畑で作った」「私の家／畑でとれた」といった発話であり、これらは事実説明(申し出の背景)の一種と言える。「私が作った」という表現も現れるが、これは東北に目立つ。

「旅行の誘いを受け入れる」

「私」が出現するのは、「私も行く、行くか、行ってみるか、行こう」といった意志表示の発話である。

「会合を中座する」

「私」が出現するのは、「私は病院に行かなければならない」「私はこれから用事がある」といった事情説明(中座の理由)の発話である。「私は中座する」「私は先に帰る」「私は失礼する」といった意志表示にも「私」が出現する。

「孫が一等になる」

「私」が出現するのは、孫を表す「私の孫」という表現である。「私の孫もたいしたもんだ」「私の孫もがんばった」「私の孫は足が速い」「さすが／やっぱり、私の孫だ」といった評価提示の発話に「私」が現れる。また、足の速い孫が「私に似ている」という判断提示(あるいは評価提示)の発話にも「私」が現れるが、これは東北に多い。

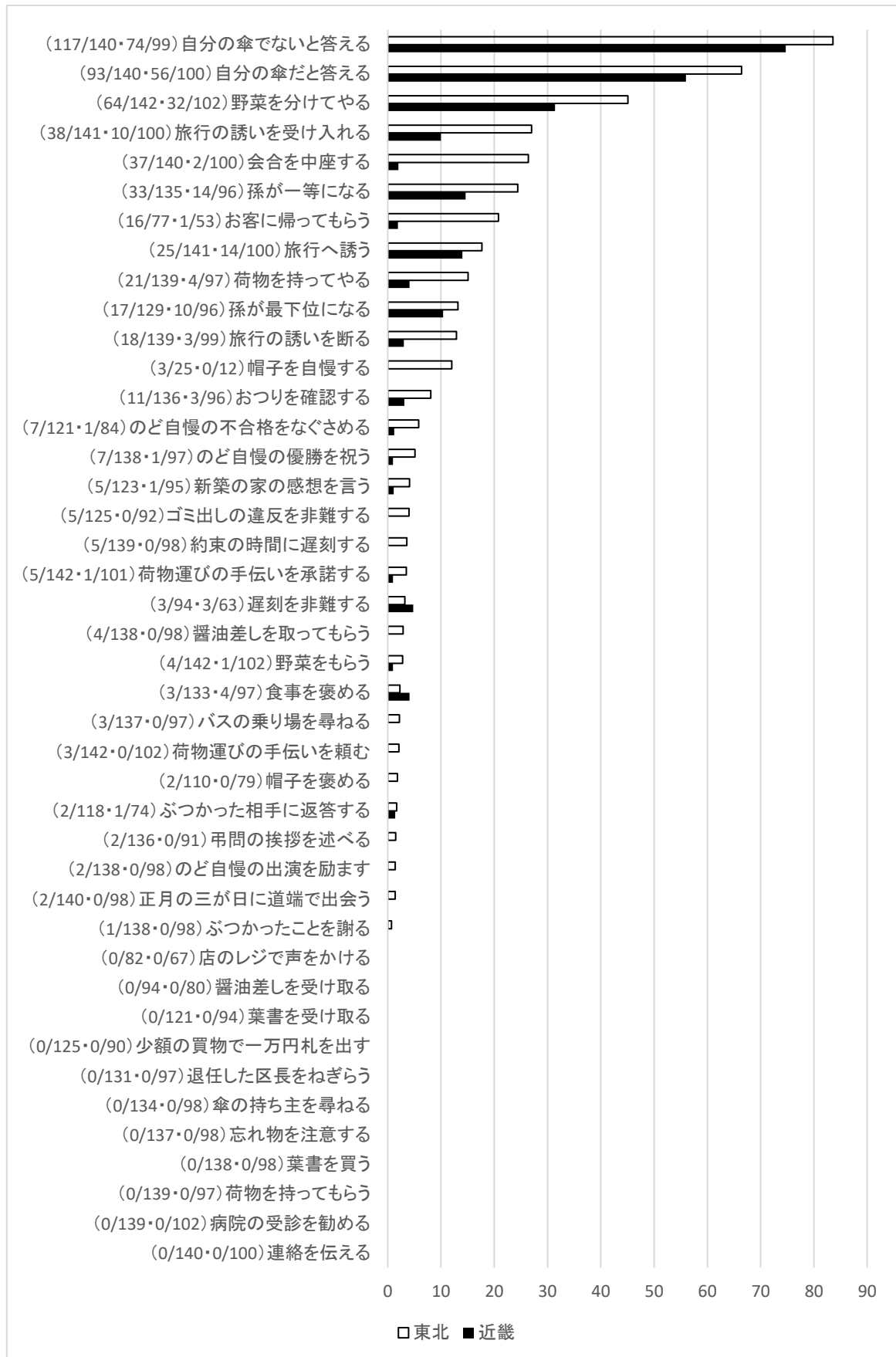


図1 「話し方の全国調査」における「私」(場面ごと)

「お客に帰ってもらう」

「私」が出現するのは、「私は用事がある」「私は予定がある」「私は〇〇しなければならない」といった事情説明（催促の理由）の発話である。

「旅行へ誘う」

「私」が出現するのは、「私も行く」「私も行こうと思っている」といった事実説明（勧誘の補強）の発話である。

「荷物を持ってやる」

「私」が出現するのは、「私が持ってやる」「私も持とう」「私も手伝う」「私にも手伝わせてほしい」といった意志表示の発話である。

「孫が最下位になる」

「私」が出現するのは、足の遅い孫が「私に似ている」という判断提示（あるいは評価提示）の発話が目立つ。ほかに、「私の孫だからしかたがない／だめだ」といった評価提示や「私も小さいときは遅かった」「私の家族はみな足が遅い」といった事実説明（評価の背景）の発話もある。

「旅行の誘いを断る」

「私」が出現するのは、「私は行けない」といった意志表示や「私は結婚式がある」といった事情説明（断りの理由）の発話である。東北では「私も行きたいのだが」といった希望表明にも「私」が出現する。また、事情説明（断りの理由）に出てくる甥の結婚式についても、単に「甥の結婚式」とするのが近畿であり、「私の甥の結婚式」のように「私」まで言うのが東北である。

以上を見ると、意志表示、希望表明、判断提示、評価提示、事実説明、事情説明といったさまざまな種類の発話に「私」が現れていることがわかる。この場合、近畿より東北で「私」の出現が勝るのは、ひとつにはこれらの発話自体の現れる割合が、当該の場面で近畿より東北で多いということがある。例えば、「野菜を分けてやる」の場面であれば、「私が作った」「私の家で作った」「私の畑でとれた」のような、野菜の出所が「私」や「私の家・畑」であることを述べる発話が、近畿より東北に多く現れるということである。

もうひとつは、同様の発話であっても、そこに「私」が入るか入らないかで違いが出てくるということがある。例えば、「会合を中座する」の場面であれば、左に示すように、すべての

	東北	近畿	地点で「(私は) 病院に行かなければならない」「(私は) これから用事がある」といった事情説明の発話や、「(私は) 中座する」「(私は) 先に帰る」といった意志表示の発話が回答されており、その点で東北と近畿に違いはない。そうした同様の発話であっても、東北では先の(14)(15)の例のように「私は～」という人が一定程度いるのに対して、近畿では(16)(17)の
事情説明のみ	5	6	
意志表示のみ	7	8	
両方あり	128	86	
両方なし	0	0	
計	140	100	

例のように、そういう人はほとんどいないという差が生じている。上記の「旅行の誘いを断る」場面において、「私の甥の結婚式」（東北）と「甥の結婚式」（近畿）とで違いが出るというのも、やはり同じ文脈での「私」の有無の差である。

2.2. 文脈上の必要性和「私」

あらためて図1をご覧ください。この図では東北の「私」の出現率の高い順に場面を配列してある。全体として右肩下がりの傾斜を描いており、近畿も大局的には東北と似たような傾向を示すと見てよい。

こうした出現率の違いは、場面による「私」の必要性の違いによるものであろう。例えば、高い出現率を示す「自分の傘でないと答える」「自分の傘だと答える」といった場面では、相手からの問いかけに対して、「私の傘ではない」「私の傘だ」のような誰の傘かを述べる答え方が期待され、そこでの「私」の使用は半ば義務的であると言える。一方、出現率ゼロの「傘の持ち主を尋ねる」の場面では、「あなたの傘ではないか」という趣旨の問いかけの中に「私」を盛り込む必要性はほとんどないと考えられる。このように、場面ごとの「私」の必要性の強弱が図のような傾斜となって現れたと見てよい。

しかし、問題は近畿の傾斜が必ずしも東北の傾斜と一致しない部分があることである。大まかには類似の傾向を示すものの、東北と近畿のグラフには何か所かですれが生じている。「私」の出現率は全体として東北より近畿の方が低い。それならば、東北の値を一定の割合で減じた平行的な傾斜が期待されるどころ、そうはなっていない。これはなぜだろうか。

図1のグラフで、上で取り上げた11場面の中から東北に対して特に近畿での落ち込みの大きい場面（東北の数値の半分以下の場面）を抜き出すと次の5場面になる。

「旅行の誘いを受け入れる」

「会合を中座する」

「お客に帰ってもらう」

「荷物を持ってやる」

「旅行の誘いを断る」

これらの場面の特徴は、東北と近畿で同じような発話がなされているものの、その中に「私」が現れたり、現れなかったりしているという点である。これは、2.1節でみた「同様の発話であっても、そこに「私」が入るか入らないかで違いが出てくる場合」に該当する。この場合、「私」が入りやすいのはもちろん東北の発話である。各場面の回答を1例ずつ挙げてみよう。

(18) ンダラ オレモ 行ッテミッガァナ。（「旅行の誘いを受け入れる」岩手県奥州市水沢区谷地明丹）

(19) オレ コレガラ 病院ノ予約 アッカラ、ワリゲンチョ 抜ゲッカンナイ。座長ニワ前モッテ ユッテアッカラ。（「会合を中座する」福島県福島市松川町天王原、(15)の再掲）

(20) ワリンドモ、俺 チョット 用事 アッテ 出ネマネナヤ。ゴメンヨ。アドガラ タノムデェ。（「お客に帰ってもらう」山形県鶴岡市下山添字一里塚）

(21) 重デアソーダゴド。ドレ オレア 半分 持ッテケルカラ ヨゴセ。（「荷物を持ってやる」秋田県雄勝郡東成瀬村田子内字源頭畑）

(22) アー ダメダ。ソノ日 オレノ甥ッ子ノ結婚式ダ。行ガンネ。（「旅行の誘いを断る」宮

これらの回答にはいずれも「私」が現れている。しかし、これらの「私」は必須の要素かというかならずしもそうでない。共通語の感覚ではそれを抜き去っても意味が通じ、十分会話が成り立つ。それは、会話の文脈や場の情報から、誰が主体であるか、誰のことを言っているかが自明であるからである。「会合を中座する」あるいは「お客に帰ってもらおう」ときに、単に「病院に行かなければならない」「用事がある」と言えば、それは話し手本人のことを言っていることは明確である。あえて「私は」と言わなくとも聞き手に十分伝わる。「旅行の誘いを受け入れる」「旅行の誘いを断る」も、「あなたも行きませんか」と誘われているわけだから、「私も・私は」と言わずとも、「行きます」「行けません」だけで済むであろう。行けない理由の甥の結婚式も、「私の甥の～」と言わなくとも誰の甥であるかは明白である。相手の「荷物を持ってやる」ときに「持ってやるよ」と言えば、それは話し手が荷物を持つことは当然であり、わざわざ「私が」と言う必要はなさそうである。

このように、東北と近畿の違いは、全体的な頻度の差だけでなく、文脈上、あまり必要でないときにも、東北では「私」が現れやすいということがあると考えられる。これを、次のようにまとめておこう。

[3] 東北方言は近畿方言に比べ、文脈上、必要性の弱い場合にも「私」が発話に現れやすい。

3. 会話資料から見た「私」

ここまで、「感動詞の全国調査」と「話し方の全国調査」のデータに基づいて「私」の問題を考えてきた。これらの調査は記述式であり、その場面での会話を想定して回答を記入してもらっている。ただし、実際の会話でのやりとりを記録したものではない。

それでは、実際の会話では「私」の出現状況はどうだろうか。次に、会話データを用いて検討してみたい。ただし、会話資料を使ってこの問題を分析することはなかなか難しそうである。なぜなら、「私」の出現の多寡は会話の話題によっても影響されるので、量的な問題を検討するには慎重にならざるを得ないからである。特に、「自由会話」の場合は話題がさまざまであり、比較には向かない。そこで、ここでは「場面設定会話」のデータを使用することにした。場面設定会話といえども、話の展開には幅があるのでそこは注意しなければいけないが、話題のコントロールはある程度できており、地域間の量的比較に耐えうると判断した。利用したのはNHKの『全国方言資料』と国立国語研究所の『日本語諸方言コーパス (COJADS)』である。

3.1. 『全国方言資料』と『日本語諸方言コーパス』の「私」

まず、『全国方言資料』を取り上げる。この会話資料には、「あいさつ」という名のもとに、「朝、ひとの家をたずねるとき」「夕方、ひとの家を辞するとき」「道で知人にあったとき」「買物のとき」「夫の出かけるのを送るとき」「夫の帰りを迎えるとき」「不祝儀」「祝儀」の8つの場面設定会話が収められている。このうち、第1巻「東北・北海道編」と第4巻「近畿編」を

意味	形式	東北	近畿
1人称単数 (私)	オレ・オラ・ウラ	53	11
	オイ・オエ	4	0
	ワ・ワー	9	2
	ワタシ・アタシ・アテ	0	12
	ワシ・ワヒ・アシ	1	17
1人称複数 (私たち)	ワタクシラ	0	1
	ワシラ	0	1
1人称「家」 (私の家)	オライ・オラエ・オラヤ	6	0
	オエ (俺の家)	2	0
	オラホー	1	0
	オレトコ・オラトコ	6	0
	ワシトコ	0	1
	ウチ	0	1
	テマエ	0	1
計		82	47
会話文字化頁数		145頁	195頁
1頁当たりの出現数		0.57	0.24

表2 『全国方言資料』における「私」

意味	形式	青森・宮城	大阪・奈良
1人称単数 (私)	オレ・オラ	14	0
	ワ・ワー	14	0
	ワレ・ワエ	2	0
	ワタシ	8	4
	ワシ	0	13
	ワイ	0	1
	ボク	0	1
1人称複数 (私たち)	ワタクシラ	0	1
	ワシラ	0	1
	アタシタチ	1	0
1人称「家」 (私の家)	オラエ	6	0
	オイ	3	0
	イエ・イ	3	1
	オラホ	1	0
	ウチ	2	19
計		54	41
会話時間		3147秒	3569秒
1分当たりの出現数		1.03	0.69

表3 『日本語諸方言コーパス』における「私」

調査した。第1巻は東北地方に当たる10地点を、第4巻は近畿地方の12地点を対象とした。

結果を表3に示す。ここでも、1人称単数のほか、1人称複数と「私の家」に当たる形式も取り上げた。なお、会話の全体的な分量が東北と近畿で異なるので、ひとつの目安として、出現数を文字化データの総頁数で割り、1頁当たりの出現数を示しておいた。

これを見ると、東北での「私」の出現は近畿のそれより多いことがわかる。1頁当たりの出現数で比較すると、東北は近畿の2倍以上の数値となっている。1つ目の仮説、「近畿方言より東北方言の方が、「私」が発話に現れやすい」は、会話データのひとつである『全国方言資料』からも裏付けられた格好である。

次に、『日本語諸方言コーパス』について見てみよう。この資料は今も構築中であり、また、収録時の地点ごとの事情により、現段階で利用できる場面設定会話のデータは、東北で青森県弘前市と宮城県仙台市、近畿で大阪府大阪市と奈良県五條市の4つとなる。場面は東北と近畿の両方で収録されている「見送り」「迎え」「訪問(朝)」「訪問(昼)」「訪問(夜)」「辞去」「道での挨拶(朝)」「道での挨拶(昼)」「道での挨拶(夜)」「季節の挨拶(春)」「季節の挨拶(夏)」「季節の挨拶(秋)」「季節の挨拶(冬)」「特有な挨拶(正月)」「特有な挨拶(暮れ)」「祝儀」「不祝儀」「出産祝い」「病気見舞い」「物を借りる」「依頼」「無心」「指示・助言」「談判」「勧誘」「願望・許可」「お詫び」「買物」「うわさ話」の29場面を取り上げた。ただ、東北と近畿で共通するといっても、地点によって欠けている場面があったり、逆に、同じ場面の複数種の会話が収められたりしている場合があるので、厳密な比較にはなりにくい点、注

意が必要である。

結果は表 3 に示した。取り上げた地点の会話時間が異なるので、各形式の合計を会話時間で割って 1 分当たりの「私」の出現数を示しておいた。これを見ると、やはり東北の出現頻度が近畿の出現頻度をかなり上回る結果となった。先に見た『全国方言資料』でも同様の結果が得られていることから、会話資料の分析からも、「近畿方言より東北方言の方が、「私」が発話に現れやすい」という仮説は成り立つと言えそうである。

2 つ目の仮説、「言語行動の種類に関わらず、東北方言は近畿方言より「私」が発話に現れやすい」は、今回の会話資料の場合、いわゆるあいさつ関係の場面が多いという制約があるものの、それでもさまざまな種類の言語行動が含まれることから、やはりそれを支持することができそうに思われる。この点は、なお検討したい。

3.2. 文脈上、不必要な「私」

会話資料で話者のやり取りを見ていると、共通語の感覚ではここで「私」は出なくともよいのと思われる個所に「私」が現れることがある。それは、近畿ではなく東北の会話についてである。これは 2.2 節で提示した 3 つ目の仮説、「東北方言は近畿方言に比べ、文脈上、必要性の弱い場合にも「私」が出現しやすい」に関わることである。ここでは、『全国方言資料』から、そのような個所をいくつか指摘してみる（元資料の共通語訳は方言文のあとに () に入れて表示した）。

(23) f1 シタラ ホレ コレト コレト イーゴッタ ヘダラ サンジョクサ タテテレ
クダセ (それなら そら これと これが いいですね。それじゃ 3 足に たてて
おいてください。)

m1 ハー ヨガス (はあ、ようございます。)

f1 ワ ソコマデ マンツ イッテクルシケネ (わたしは そこまで ちょっと 行
ってきますから。)

m1 ハーハー ヨガス ヘバ ソノウチネ ワ チャント ハ タテテオキマス (は
いはい ようございます。それでは そのうちに わたしが ちゃんと たてておき
ます。)

(中略)

f1 マンツ アリガトゴジャス (どうも ありがとうございます。)

m1 ハー シタラ ハ ワ タテテ オキマススケニ カエリニ マッテゴアヘ
ドモ アリガトゴアシタ (それでは わたしは たてて おきますから 帰りに お
寄りください。どうも ありがとうございました。)

(青森県三戸郡五戸町「4 買物」第 1 巻 72・73 頁)

この場面では、お客が下駄屋で下駄を買い、他所へ用足しに行っている間に鼻緒を立ててくれるよう店の人に頼んでいる。最初の f1 の「私」は共通語の感覚ではなくともよいが、あってもおかしくはない。しかし、それを受ける m1 の「私」は、f1 の「私」と対比の上で使用さ

れたものと思われるものの、共通語だとそこで「私」と言わない方が普通ではなかろうか。最後の m1 の「私」は、このように繰り返されるとくどさを感じる。

(24) f アー ンデー オサカナコ スコス カ ホスス ナット シタツツ カッテキテ
クラッシュェ (ああ、それでは おさかなを 少し ほしいし、納豆を 二つ 買って
きて くださいよ。)

m ハー ソノグレアダラ オンベー ニ ハー オラ ワカネダ (はあ、それぐらい
なら。重い 荷は おれは 困るよ。)

(岩手県胆沢郡佐倉河村「5 送り」第 1 巻 134 頁)

妻から買物を頼まれているが、夫は重い品物は嫌だと答えている。共通語の感覚では、こ
でわざわざ「私」という必要はない気がする。

(25) f ハエ オレ マツ コギヤー オメアサー ムシニ キタテバケアー (はい、わた
しは まあ これ おまえの家に 頼みに 来ましたよ。)

m オヤ アルムシナバ ナニ エタテ (おや できる頼みならば なに いいけれど
も。)

f オレ マタシャ ムスメ アシミニ キタタテー ナンモ ヤルモノ ネーシ ナ
ントエ イマナバ マダ モツ ツタテモ マダ ニシヤクナル トコダス アズ
コデモ アレバ ヤガナテキタレバ オメアー (わたしは また 娘が 遊びに 来
ただけけれども なんにも 持たせてやるものが ないし、なんと 今なら まだ も
ちを ついたって まだ 腐る 時候だし、あずきでも あれば お世話になろうと
思っただけけれども あなた。)

(秋田県南秋田郡富津納内村「4 買物」第 1 巻 197・198 頁)

女性は、実家に来た娘に持たせる品物を買って求めに来ている。1つ目の「私」はあってもお
かしくないが、2つ目はあらためて「私」という必要があるだろうか。

(26) m ゴニンデモ ロクニンデモ イーダガナンシ (5 人でも 6 人でも いいのだけ
どね。)

f ンデマー オラドコデワ ソー イネーカラ サンニンダケニ スルト オラ ト
ナリデ タシカー アレシテカ イッテモラエッペド オモーカラ オレ タノム
カラ ソーシッド ゴニン イッテ ヤルオン (それでまあ おれのところでは そ
んなに (人が) いないから 3 人だけに することにして、おれは 隣りで たし
か あれして 行ってもらえるだろうと 思うよ、おれが 頼むよ。そうすると 5
人 行って やるよ。)

(福島県河沼郡勝常村「1 朝」第 1 巻 298 頁)

隣家から手伝いを頼まれた女性が、それに対応する場面である。このうち、「オラドコ (私

の家)」は文脈上、必要な要素と考えられる。最後の「私」も隣の家に頼む主体が自分であるという趣旨だから、あった方がよい。しかし、真ん中の「私は～と思う」は、あえて「私」という必要がなさそうに思われる。

「私」が発話に現れるのは、「私」がなければ理解しにくいとか、対比・特立的に自分を提示しなければいけないとか、そういう必要性の強い場合である。しかし(23)～(26)の例は、共通語感覚ではそうしたケースではなさそうに見える。近畿方言と比較して、東北方言の「私」の頻度が高いのは、やはり、必然性の感じられない位置にも「私」が現れることが関係しているのではないかと考えられる。2.2節で、「話し方の全国調査」の結果から導き出した「東北方言は近畿方言に比べ、文脈上、必要性の弱い場合にも「私」が出現しやすい」という仮説は、会話資料からも支持できそうに思われる。

4. なぜ「私」が発話に現れやすいのか

ここまで、東北方言と近畿方言を比較し、あるいは共通語感覚にも照らしながら、「私」の発話への現れやすさを見てきた。その結果、次の3点を指摘することができた。

- [1] 近畿方言より東北方言の方が、「私」が発話に現れやすい。
- [2] 言語行動の種類に関わらず、東北方言は近畿方言より「私」が発話に現れやすい。
- [3] 東北方言は近畿方言に比べ、文脈上、必要性の弱い場合にも「私」が発話に現れやすい。

これは、近畿方言と比較して、東北方言では常に「私」、「私」と言うようにできているということであり、いわば「私」の発動装置のスイッチが簡単に入りやすい状態になっていることを意味する。その理由は、[2][3]によれば言語的に説明することが難しそうである。もちろん、「私」が現れる場合を文法論的、談話論的に慎重に分析していく必要があり、それは今後の課題である。ただ、そうした方向での検討には限界があるように感じられる。

ここで思い起こされるのは、言語の使用に社会的な視点を導入した「高文脈 (high context) 文化」「低文脈 (low context) 文化」という概念である。これは、知識や情報が互いに共有される緊密な社会か、それともそうでないかによって会話のスタイルが異なってくるという考え方である。すなわち、「高文脈文化」では共有知識や場面情報など言葉以外の情報(文脈)を利用できるので、かならずしも言葉で示す必要がない。一方、「低文脈文化」では言葉以外の情報に頼ることができないので、伝達したい情報は積極的に言葉で表現するという違いである。

こうした視点で世界の言語を見ると、日本語は「高文脈文化」の典型であるとされる。井出(2006: 219)によれば、そのような日本語の性質ゆえに、私たちは「相手にわざわざ言わなくても良いものと、言わねばならないものとの区別を判断する」のであり、「たとえば、自分が話していることは相手には自明であるので、自分を指す言葉、つまり一人称詞を発話のたびに言及する必要はないという判断をする」のである。

このような見方によれば、「私」が現れやすい東北方言は、「高文脈文化」である日本語の中では異質の存在であり、英語に近い「低文脈文化」としての性質を持つということになる。し

かし、小林（2023：23章）で論じたように、言語運用全般から見て「発言性」が低く、言葉に依存しない性質を示す東北方言は、近畿方言などに比べて断然「高文脈文化」としての色彩が強いと思われる。この矛盾をどう解決したらよいだろうか。

まず、ある言語を簡単に「高文脈文化」「低文脈文化」に振り分けることは、そもそも難しいということがあるかもしれない。その上で言えば、東北方言は基本的に「高文脈文化」としての性質が強いと考えてよいと思われる。ただ、「知識や情報が互いに共有される緊密な社会」であることが、直ちに「だから言わなくともよい」というふうにはつながらず、「だから言わなければいけない」という方向で現象化する場合もあり得るということではないかと考えられる。そのひとつが「私」の現れやすさということである。

ここで、私なりの説明を行ってみよう。それは、小林（2023：24章）で発話態度の問題として論じた「自己と他者の同一性」をもとにした見方である。東北方言は近畿方言と異なり、コミュニケーションを円滑に行うための「言語的発想法」が発達していないが、その根底には、社会的に見て東北ではそもそも「自己」と「他者」が十分分離しておらず、一つのものとして認識されているということがありそうだと考えたのである。

少し詳しく説明しよう。知識、思考法、価値観、感覚・感情など人間の“知”の総体を「情報」と呼ぶならば、「自己」と「他者」の同一性とは、両者の間でそうした情報が一致していることを指す。自分と相手と同じことを知っていて、同じふうを考え、同じように感じる。そのように、両者が同じ情報を共有している状態が自己と他者の同一性である。そういう状態であれば、互いの意思疎通は極めて容易なはずであり、あえてコミュニケーションのための「言語的発想法」を磨き上げる必要はない。東北の発話態度は、基本的にこうした情報共有のあり方を基盤に持つと思われる。

一方、近畿方言は基本的に「自己」と「他者」が明確に分離した状態にあると考えられる。そもそも自分と相手は別の存在であり、持っている知識や考え方、感じ方が異なるのは当たり前というのが近畿的な認識のあり方だと言える。だからこそ、相手とのコミュニケーションを効率的・効果的に行うために「言語的発想法」を発達させる必要があった。相手を自分と同一の存在ととらえるか、それとも、別個の存在として認識するかの違いがそこにはある。

こうした「自己と他者の同一性」をもとに考えると、東北が近畿より「私」が発話に現れやすいことの説明が可能になる。すなわち、東北は「自己」と「他者」の同一性が強く、一体化して共同体を形成している。「自己」と「他者」とが未分化なまま共同体に埋め込まれ、埋没した状態がデフォルト（常態）であると言ってもよい。この状態だと、発言を行う際、誰が主体であるか、誰のことを言っている

のが曖昧であり、それを明示することが重要になる。そこで、「自己」について述べるときには、一旦「他者」との一体化を解消し、共同体に埋没した「自己」を浮上させる必要が出てくる。その言語的な操作が発話における「私」の出現と考えられ

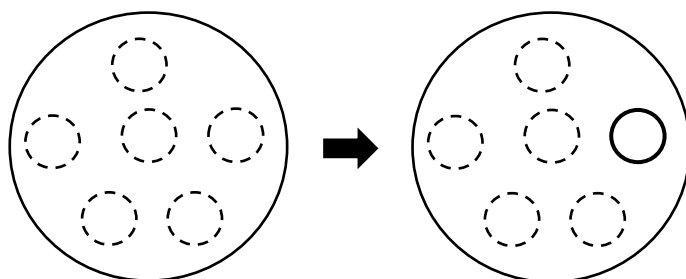


図2 東北的な「自己」のあり方と「私」の出現

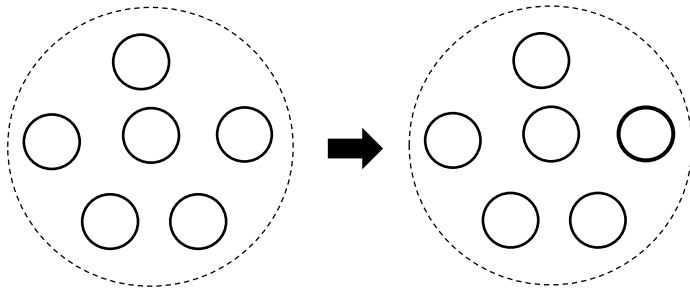


図3 近畿的な「自己」のあり方と「私」の出現

る(図2)。

これに対して、近畿はもともと「自己」と「他者」が分離している状態がデフォルト(常態)である。共同体はもちろん存在するものの、東北のようにそこに「自己」が埋没するようなことはなく、個々の「自己」が際立っている。これだと、発言

を行う際、特に何もしなくとも、その主体が発話者本人であり、発話者のことを言っているという理解は、前もって保証されている。そうした状態では、「自己」について述べるときに、あえてそれを「私」で表現する必要性が弱い(図3)。

東北と近畿の発話における「私」の出現の差は、以上のように、現象の基盤となる「自己」と「他者」の社会的なあり方の違いに起因するというのが私の考えである。

この考えをさらに補強してみよう。2節で取り上げた「話し方の全国調査」の結果において、東北と近畿の開きが特に顕著だったのが、「会合を中座する」と「お客に帰ってもらう」の場面であった。これらに共通しているのは、共同体からの離脱に関わる場面だということである。東北では、本来、「自己」は「他者」と一体化し、共同体に埋め込まれていなければいけない。ところが、「会合を中座する」では、病院に行くという理由で共同体(この場合は町内会の会合)からの離脱を余儀なくされている。そうすると、「自己」と「他者」の同一性を解消し、「自己」を共同体から剥ぎ取る操作が必要となる。その言語的表出が「私」の発話への出現と考えられる(図4)。「お客に帰ってもらう」の場合は、その場の構成員は自分と相手の2人であるが、構図としては図4の場合と同様に理解してよい。つまり、用事がある(から帰れ)という発言は、「自己」と「他者」の一体化を解き放ち、両者からなる共同体を離脱することにはほかならないからである。

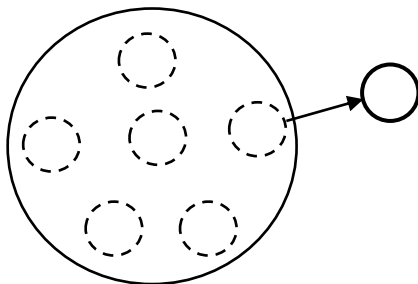


図4 共同体から離脱する「自己」

ここで重要なのは、こうした共同体からの離脱は、「自己」と「他者」の同一性から見たとき、スポットを浴びやすい現象だということである。「自己」と「他者」がもともと分離していれば気になることでなくとも、それらの同一性が強固で一枚岩の共同体を形成する社会では、そこから外れる行為にはどうしても注意が向くことになる。「会合を中座する」と「お客に帰ってもらう」において、近畿と東北で顕著な差が現れたのは、そのあたりに原因があるのではないかと思われる。この説明は、「旅行の誘いを断る」にも当てはまるものであろう。

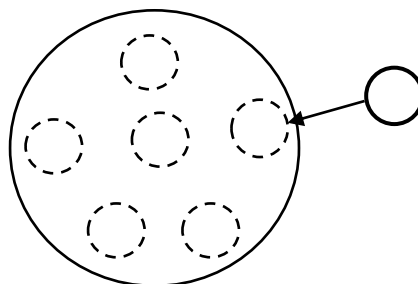


図5 共同体に参入する「自己」

一方、共同体への参入、すなわち、「自己」と「他者」の同一性が形成される場合も、「私」は出現しやすいと考えられる。「旅行の誘いを受け入れる」は、今、共同体の外にいる自分が入り、「他者」と同一化しようと

する行為である(図5)。この行為も、「自己」と「他者」の一体化があるべき姿である社会では、言語的にマークされやすい現象と思われる。「荷物を持ってやる」は、その場の構成員は自分と相手の2人であるが、構図としては図5のケースと同様に理解してよい。「私が持ってやる」というのは、困っている「他者」の領域に「自己」が参入することで一体化を図り、あるべき共同体を形成する行為とみなすことができる。

このように、東北方言では「自己」と「他者」の同一性に基づく共同体の存在が強く意識されている。したがって、そこからの離脱やそれへの参入には注意が向けられ、行為の主体を明示する必要性が高まると考えられる。離脱・参入の発話において、近畿より東北で特に「私」が現れやすいのは、以上のような理由によると言えよう。

5. まとめ

以上、発話への「私」の出現の地域差について、東北方言と近畿方言を対比し、複数の資料を使いながら考えてきた。ここまで述べたことをまとめると次のようになる。

- ① 近畿方言より東北方言の方が、「私」が発話に現れやすい。東北方言における「私」の出現は言語行動の種類に左右されないだけでなく、共通語の感覚では、文脈上、必要性の低いと思われる場合にも認められる。
- ② 東北と近畿における「私」の出現の差は、「自己」と「他者」の社会的なあり方の違いに起因する。東北では「自己」と「他者」の同一性が存在し、共同体の中に「自己」が埋め込まれる状態がデフォルトとして設定されている。それゆえ、「自己」がフォーカスされると、それを言語的にマークする操作が必要になる。それが発話における「私」の出現である。
- ③ 東北では、「自己」と「他者」の同一性を前提とした共同体が強く意識されている。したがって、共同体の外に位置する「自己」は言語的なマークが厳しく、共同体からの(への)離脱・参入に関わる発話には特に「私」が現れやすい。
- ④ 近畿は「自己」と「他者」は分離しており、共同体の中でも個々の「自己」が独立的である状態がデフォルトである。そのため、「自己」に言及するときも、それを言語的にマークする必要性は弱く、その分、東北に比べて「私」が発話に登場する機会は少ない。

さて、この講演では「私」に焦点を当てたが、対話の相手である「あなた」についてはどうだろうか。「自己」と「他者」の同一性、および、それに基づく共同体の存在を前提にすれば、「あなた」の場合も「私」と同様の傾向が見られるのではないかと思われるが、この点はまたあらためて考えてみたい。

また、今回は顕著な違いが予想される東北と近畿を対比したが、他の地域を含めて全国的な視野からこの問題を論じることも必要である。地理の軸から通時の軸に目を転じてみると、「私」の現れやすさには歴史的な変化はないのか、そして、それと方言との対応関係はどのようなかといった点も気になってくる。社会的な視点から見れば、「自己」と「他者」の同一性の強弱は、農村型社会と都市型社会との違いとも呼応している可能性が高く、そうした角度から

の検討も重要になってこよう。

なお、ここでは「私」の出現の説明に、社会的レベルの言語態度とも言える「自己と他者の同一性」という見方を利用した。今後の研究において、この考え方の有効性・射程はどうか。東北方言では、例えば、自分の事情を開陳すると同時に、相手のプライバシーに踏み込む言語行動がとられやすいということがある。また、配慮性の低いコミュニケーションが行われやすく、直接的な指図や規範の提示などによる相手への行動統制が見られる。さらに、感動詞・感動表現の応酬により、会話の場に共感に基づく一体感の醸成が図られるということもある。そして、東北方言とは逆に、近畿方言ではこれらの特徴は抑えられる傾向にある。こうした事実もまた、「自己と他者の同一性」の視点から説明が可能ではないかと思われるが、いかがだろう。さまざまな言語行動やコミュニケーションの取り方の違いを「自己と他者の同一性」という見方でどこまで説明できるか、そこを追及してみるのもおもしろそうである。

文 献

井出祥子（2006）『わきまえの語用論』大修館書店

国立国語研究所(中納言 2.7.2、データバージョン 2023.03)『日本語諸方言コーパス (COJADS)』
<https://www2.ninjal.ac.jp/cojads/index.html>

小林隆（2023）『語用論的方言学の方法』ひつじ書房

小林隆編（2021）『全国調査による言語行動の方言学』ひつじ書房

小林隆編（2022）『全国調査による感動詞の方言学』ひつじ書房

齋藤すみれ（2019）「LINE スタンプの方言使用に見る地域性」『日本方言研究会第 109 回研究発表会発表原稿集』

澤村美幸（2011）『日本語方言形成論の視点』岩波書店

日本放送協会編（1966a）『全国方言資料 1 東北・北海道編』日本放送出版協会

日本放送協会編（1966b）『全国方言資料 4 近畿編』日本放送出版協会

LINE スタンプ（2023 年 8 月閲覧）

「トメ子さん 宮城弁」

<https://store.line.me/stickershop/product/1357523/ja?from=sticker>

「岩手県の方言！ぺっこオニ 6!デカ文字版だよ」

<https://store.line.me/stickershop/product/4970991/ja?from=sticker>

「おもしろい大阪のおばちゃん PART2」「京都弁☆ラガちゃん」

https://www.line-atsujin.com/list_t/%E3%81%84%E3%82%84%E3%82%84/popular_1.html

付 記

『日本語諸方言コーパス (COJADS)』の扱い方や分析については、中西太郎先生（東北大学）からご教示を得た。ここに記して感謝申し上げる。